

氏 名 : 川池 順也  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博乙第104号  
学位授与年月日 : 令和3年3月16日  
学位授与の要件 : 学位規則第4条第2項該当 論文博士  
学位論文名 : 「病気がある児童生徒の学習支援と授業づくりの学校臨床学的検討」—  
個人に最適な ICT 活用と本人・保護者参加型の教育実践の構築—  
論文審査委員 : (主査) 教授 橋本 創一  
(副査) 教授 朝倉 隆司 教授 泉 真由子  
教授 堀田 香織 教授 大伴 潔

## 学位論文要旨

序論は、第1から3章で構成されている。第1章では、研究の背景と意義として、病気がある子どもの概念について説明した。第2章では、病気の概念について「医療」「心理学」「社会学」そして「教育学」から、どのように捉えているのかを主な文献を調査・整理した。第3章では、病気がある子どもの教育的支援として、1) 病歴史、2) 学習支援、3) ICT活用)、4) 諸外国の教育、5) 本論文で定義する病気のある子どもについて説明した。

第I部では、病気の児童生徒の授業参加や学習支援におけるニーズの把握を文献調査と質問紙調査により検討を行った。第4章の病気がある児童生徒への学習支援の現況では、文献調査とりわけ実践研究のカテゴリー化を行うことによって、「身体疾患」「心身症・精神疾患等」「重度・重複障害」の3つのカテゴリーに分類できることが分かった。第5章の病気がある児童生徒の学習支援の現況と課題では、病気がある児童生徒の授業を担っている教師に向けた調査を行った。

そして、「身体疾患」「精神疾患」については、教師が疾患に応じた手立てを提供できる精査し、学習支援を進めていることが分かった。「重度重複障害」については、教師が拠り所とするアセスメントツールがあるか否かで、学習支援に繋げているケースが多いことが示唆された。第6章では、病気がある児童生徒の支援ニーズと課題として、病弱特別支援学校に在籍したことがある本人への調査を行った。

そして、結果から病弱特別支援学校が行っている少人数にきめ細やかな指導による授業や進路指導と教師による個々に対する声かけなどの心理的なケアが有用であったと優位に当事者が捉えていることが分かった。

第II部では、学習支援ツール（環境整備と支援技術）に関する検討について、質問紙調査及び授業実践を通して検討を行った。第7章のインクルーシブ教育に向けた理解啓発の現況や課題では、地域の通常の学校における特別支援教育の理解推進について、支援環境の基礎的環境整備の調査を行った。その結果、ハード面として地域の小・中高等学校等の支援ニーズに応えるための人的保障や時間の確保を行うことが求められていることが分かった。内容と

しては、病気に対する学校生活における支援のための豊富なコーディネーション方法の実践についての記録を収集蓄積すること、身体疾患や学校不適応そして、重度・重複障害と幅広く病気のある児童生徒の疾患に対する情報提供を行う必要性と特別支援学校における病気の子どもに対するセンター的機能の充実が図られていく必要性が示唆された。第8章の学習支援（ICT活用）では、病気がある児童生徒への訪問教育を行っている教員に対し、ICTを活用した授業支援の実際について質問紙調査を行った。その結果、ICTを活用した有効な授業実践を行うことができている個々に感じる事例はあるものの、その実践を教員同士で見合い評価や研修をする時間がないこと、訪問教育特有の指導上の工夫と難しさの両面から、「保護者対応の重要性」が重要であると考えていることが分かった。第9章の学習支援（ICT活用）では、ICT機器からタブレット端末を活用した授業の支援の実際について、エビデンスに基づいた検証と評価を行った。

検証その1では、自分の操作で適することばや写真を選択できるようにしたいという本人・保護者の願いを実現し、児童の身の回りにあるものを写真と言葉で選択できるという支援ニーズに応えるための二者択一ソフトを開発して、時系列による正確性や要する時間の変化から検証を行った。検証その2では、「昨日・今日・明日」という概念の変化が分かり、過去のできごとやこれからのできごとを把握できるようになるという本人・保護者の願いに応じるため、カレンダー学習プログラムを開発し、時系列による正確性や要する時間の変化から検証を行った。2つの検証の結果、検証の回数を重ねるごとに正答に要する時間は短縮され、正確性も向上した。

第Ⅲ部では、授業づくりにおける本人・保護者との合意形成として、実践研究を行った。第10章の中学校通常学級における本人と学級の合意形成による授業づくりでは、発達障害が窺える地域の通常学級に在籍する中学生の友達と共に授業に意欲的に参加したいという本人及び保護者の願いに応えるために、アセスメントチェックリストを活用して、学習環境の構造化・発問や提示方法の工夫を講じて授業の提案と実践を行った。その結果、学習での遅れや偏りと学習に対する意欲の低さの背景にある子ども自身の特性や問題を吟味し、総合的な視点から支援を行うことで、授業に対する意欲が向上し積極的に自分の意見を発言したり、友達と話し合うなどの姿に結び付けることができた。また、特別支援学校のセンター的機能としての小学校・中学校・高等学校の教員への支援機能を果たすことができた。第11章の本人及び保護者・関係機関との合意形成による授業の計画と評価では、病院に長期入院して訪問教育を受けている生徒に対して、本人・保護者の意欲的に楽しく授業に参加したい（させたい）という願いに応えるために、「ICFモデルによる個別の指導計画連携シート」を提案して、本人及び保護者・関係機関と合意形成による授業実践を行った。その結果、本人・保護者が合意した指導計画連携シートを病棟スタッフにICFの観点で学習のねらいを伝えることで、病棟スタッフにポイントを押さえた情報発信が可能となり、カンファレンスの進行もスムーズとなった。また、検証後のカンファレンスでは、ICFに関連して、それぞれの専門的見地からの報告が可能となり、現況や今後の課題について報告を行っていた。カンファレンスの意義も生徒の「情報共有」から「共通理解する」ステージとなったことが窺えた。結論では、第Ⅰ部から第Ⅲ部の小括及び総合考察を行い、今後の課題では、新型コロナウイルス

ス禍における病弱部門を有する学校の支援方策の在り方について提案を行った。